

2020年12月期上期決算説明会における主な質疑応答内容
(2020年8月11日開催 於：オンライン)

<自動車計測事業>

Q：上期の売上高・営業利益が上振れした要因は？

A：下期での検収・売上計上を予定していた案件が、顧客との相互努力の結果、上期で売上計上できたことが上振れ要因となった。

Q：上期の業績上振れに対し、下期の利益水準はかなり低い。どのような理由か？

A：下期にかけては、海外自動車メーカー向けの売上が日本向けに比べ増加することが見込まれ、収益性が低くなることが想定される。また、この数年での排ガス検査装置の需要増加による設備強化や人員増により固定費が増加しており、需要減のタイミングにおいての収益性悪化を想定している。

Q：自動車関連メーカーの収益悪化に伴って、プロジェクトのキャンセルは出ていないのか？

A：大きな案件のキャンセルは出ていない。自動車業界は全体通じて厳しい環境にあるが、将来に向けての技術開発への投資は続くと考えている。中長期的には、地域特性や用途の違いによるパワートレインの多様化が進み、研究開発を後押しすると考えている。

<半導体事業>

Q：半導体の上期業績として、売上高の伸びに対して営業利益が低水準なのはなぜか？

A：利益率の低い案件を戦略的な考えから受注したことなどがあり、上期は一時費用がかさんだことなどから低水準の営業利益となった。これら費用は下期には発生しない見込みである。

Q：ペリクル異物検査装置の将来性をどのように考えているか？

A：本製品はEUVのレティクルに使用されるペリクル面の異物検査を行う製品である。現時点での半導体事業の売上に占める割合は小さいが、半導体製造プロセスの微細化進展やEUV技術の導入が進む中で、今後、成長が期待できる市場であると考えている。

<医用事業>

Q：下期業績予想の下方修正は、病院などにおける血球計数装置の稼働率低下に伴い、消耗品（試薬）の売上が低下していることによるものか？

A：新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、患者の病院来院数の減少に伴う検査数の減少が主要因である。この状況が下期まで続くと想定し、下方修正を行った。新型コロナウイルス感染症拡大が落ち着けば、需要は回復すると見込んでいる。

<科学事業>

Q：島津製作所との協業による「LC ラマン」の中長期的な展望は？

A：液体クロマトグラフ（LC）とラマン分光の技術を持つ会社はいくつかあるが、我々二社はそれぞれの計測機器は顧客から厚い信頼を獲得してきている。今後、この二社で統合するソフトウェアをすることにより、互いのユニークな点を補完し、さらに強い製品力を持つことができると考えている。早期の上市を検討しており、社会での重要度が高まっているライフサイエンス市場での活躍を期待している。

Q：新型コロナウイルス感染症抗体検査チップの開発に取り組んでいるが、どのように市場展開するのか？

A：市場投入時期や販売計画は現時点では未定。産総研、またバイオベンチャーのビズジーン社と共同で開発に注力する。2021年の早い時点で試作機を完成させたいと考えている。

※説明会中に回答できなかった項目等について、定量・定性情報を補足しています

以上